

O S Sの生活史

第四篇

私らが採用したら、オープンソースが死んじゃうと困るんですよ

語り手＝大釜秀作

聞き手＝大川貴久

2026-07-18 56分24秒

四

私らが採用したら、オープンソースが死んじゃうと困るんですよ

語り手＝大釜秀作

聞き手＝大川貴久

2026-07-18 56分24秒

——まず最初に、ソフトウェアであつたり、パソコン等に触ったきつかけとか、そういったところから教えていただければ。

そんな古いところ？　いつだろう、高校生ぐらいですかね。シャープのポケットコンピュータっていうコンピュータがあつたんですね。あれを買ってもらったのが一番最初ですかね。PC-1211という名前の、横長の、電卓のお化けみたいな、そういうやつですね。あれを触ったのが、自分の初めて持ったコンピュータということになりますですね。

——だから、そこから入ったからBASICとかですしね。そうです、ね、かなり、今画像を拝見してるんですけど、本当にこれくらいの電卓のような形のもの。なるほど。こういうのでプログラミングみたいなの、こういうのでBASICとかをされてたっていうことですか。

実際、雑誌にね、プログラムが結構投稿されてたりするんで、そういうのを打ち込んでみたりとか。あとは高校生なんで、プリンターも一緒に買ったんですよ、確か。なので、いろんな数字の処理をさせるのにポケコンを使ってやったりとかはしてました。

——実際じゃあ、それはもうお趣味でやられてて、ずっと続けてっていう感じ。

ずっと、というか、それが一番最初に触ったものということになりますね。大学になったら、いわゆる普通のデスクトップのコンピュータを周りの人間が結構持ってたんで、それを使わせてもらったりとかいうことはしてました。ただ、自分でデスクトップのコンピュータを買ったのはずっと後で、大学院生ぐらいになった時に。けど、仕事用とか論文書き用みたいなことではなくて、完全に遊び用で、X68000というシャープのコンピュータを買ってるんですね。

——でも、そうですね、今見えますけど。なるほど。でも、まだその当時だと、やっぱりパソコンは皆さんが一人一台今持つてるような状態では、やっぱりなくて。

全然違いますね。八ビットのZ80のコンピュータでも三〇万、四〇万してましたので。そうそう簡単には買えないという。

——確かに。そう、なるほど。

プログラミング言語は、そういう意味で言うと、高校生の時にはBASICを使ってみましたけど。大学に入ってから、情報工学科の人らが持っておられるので、コンピュータをね。それを借りて遊んでみたいなのをやりました。その時に初めて真面目に学んだプログラミング言語とごうと、Pascalなんです、私は。

なので、いわゆる行番号から、そこから外れて、Pascal いろんな数値計算のプログラムを書きました、作りました、みたいなことをしてましたですね。その後に Turbo C とか、C 言語というものが世の中に出てきて、手に入るようになって、ということですかね。

C 言語もちょっと使ってみただけ、C 言語の書き方も Pascal 風になってるんで。私の、基本的に一番最初に真面目に取り組んだ Pascal の書き方で、今でもいろんなものを書くとき、PHP でもね、そんなような書き方になっちゃってるんですけど。やはり手続きの書き方といいますか。

——そうですね、C 言語が登場する前に。そうですね、私、他の方はいろいろもうすでにパソコンがあるような、生まれてからパソコンがあるような方が結構多かったんです。そうですね、パソコンが今まで身近にない方っていうのは、なかなか。

C 言語が登場する前、というの間違いなんです。C 言語が手に入るようになる前。

——普通にね。なるほど。

C 言語自体はもう、UNIX のコンピュータで、多分世の中にあったはずなんで。

——実際、そうなってくると、パソコンとかがそれこそ一般的に自身で持たれるようになってからっていうところで、ソフトウェアとかそういうところをより深く触っていくっていうような感じになってた、っていうよりは。今、オープンソースの活動とか、そういったところにつながっていった。

そこにつながるからは、ちょっと遠いですね。どっちかという、私、ハード好きなんです。大学の時には X68000 とか買ってますけど、C コンパイラとかいろいろ買ったりもしてますけど。どっちかという、自分で線を引いて八ビットのコンピュータを作ったりとか、いうことをやってました。そっちの方が楽しかったんですよ。

——そうですね、私も最近、小さいマイコンとかを触るようになったんですけど。ああいったもので実際にプログラムを書くっていうのは。

そうですね。その時は Z80 のコンピュータはあまり作らずに、MC6809 やったっけな、モトローラの。最近だと MC68000 とかいうのは、最近でもないな、だいぶ前ですけど。RISC コンピューターとか。さっき X68000 と言っていましたけど、MC68000 っていうチップがね、乗ってたと思うんですけど、あれの八ビットのやつ、6809 っていうのがあるんですよ。それがね、とても、個人的にはすごい綺麗なアーキテクチャになって

て、好きだったんですよ。八ビットのくせにカーネルモードがあったりとかね。いろいろあるんですよ、面白い。

そういうことを見ると、いわゆるOS側、サービス側に飛んでって仕事して、いわゆるユーザー側に戻ってきて、ユーザー側のプログラムを走らせて、みたいな。そういう構造とかもね、そんな頃に、こんな風に世の中を作ってるんだ、みたいなのを理解した覚えがありますね。

——実際に、それはご趣味でハードとして作られてて。一体どういう用途でとかっていうのは。

完全に遊びです、それは。

——どういうプログラムを動かしたりとか。

そこからラジコンの、モーターを動かしたりとか。ラジコンじゃない、リモコンですね。モーターがつながって。そういうのをやってみましたね。

——いいですね。そこからソフトウェアに移るっていうところっていうのは、結構大きく離れてるというような、先ほどもおっしゃってたと思うんですけど。

ソフトをやってるという意味では、今は会社ですけど、当然この当時は大学じゃないですか。大学にいた頃は、いわゆるソフト

ウェアをいじくるような研究室にいたんですよ。いわゆる学部学生の場合は画像処理の研究室、医療画像処理とかやってたんですよ。そんな時に初めてデータフロープロセッサとかもね、扱って。

それもだから、行番号どころかね、プログラムがいわゆるノーマン型のプログラムじゃないんですよ、データフローなんです。それで画像処理を高速化するんや、みたいなね。そういうようなものをプログラミングして、こういうプログラムを書いたらこんな処理ができました、みたいなのを論文で書いたりとか。昔々なんで、その程度で論文になるんですけどね。

そういうことをやったりとか。あと院生になってからは、人工知能の研究室に移ったんで。人工知能に関するもの、ベースのものとしてはLISPとか学ばされたんですけど。私自身が、データフロープロセッサって爆速で処理しますみたいな話なんで、そっち系が好きなんですな、基本的に。早い処理が好きなので。いろんな、たくさんのノードを束ねて並列に推論を行うようなモデルみたいなのがちゃんと作れるか、とかいうような、こういうものを研究して論文を書きましたですね。

ちょうどその時に、同学年といえますかね、同じ研究室で同期の人間は、いわゆる、あれだ、名前が出てこない、今のAIのベースになってる。名前が出てこない、最近ね。いわゆるニューラルネット。ニューラルネットの、いわゆるループでもって学習

—— していくっていうのについて。それが初めて世の中に、割と論文で出始めた頃なので。数学的に、あの時は、それがちゃんと学習していったら学習結果が収束していくのかどうか、みたいなのを研究してた子がいましたね、同期にね。

—— 今、私、情報学部なんですけど。ちょうどニューラルネットワークとかを使って、どういう風になっていくとかかを、まさに今、当たり前、既存の知識としてやってるっていうところで。今もお聞きしてて、そういうのが確立された時代っていうのが。

そうですね。計算力がまだまだないんです、世の中には。ちょうど RISC のコンピューターが出たかなぐらいの世界で。なので、全然、ループを回してもむちゃくちゃ時間がかかるんですよ。層が一層でもね、すごい時間がかかるっていうのを、もうずっと何日も計算を回して、結果どうだ、みたいなのをやってたのが、同期にいましたね。そんなのが隣にいたので、面白かったですけどね。

—— そういったところでソフトウェアについて関わってていうところだったと思います。それはお仕事で続けられてたっていうことなんですか、ソフトウェアに関わるのですか。

今のは完全に大学の研究でやってた話ですね。

—— 大学を卒業された後とかに、ソフトウェアに関わり続けるっていうのは、ご自身のお趣味でやられてたりとかですか。

それで、今度はそれから会社に入るわけですけど。そうすると、直前の研究内容とか、そういうのを斟酌して、いわゆるソフトウェアの開発の事業部に入れられたんですよ。私自身、希望としてはハードウェアを作りたいとかね、人の教育をしたいとかね、そっち系の希望を出してたんですけど。お前はそういうソフトの研究室から出てきたんだから、ソフトをやれ、というような話で。

ちよっと今、これ、つながってるビデオ会議の私のアカウントを見てもらったら分かるんですけども、今の所属が、入社した時の所属そのままなんです。昔々、その会社は UNIX ワークステーションを作ってたんですよ。その部署に配属されたんです。

—— 当時ですと、まだ商用 UNIX が出回ってて、Linux が出る前っていうことですね。

そうですね。その当時はやっぱり、私がちゃんと把握してないんですけど。やはり日本の中でいくつか商用 UNIX を売ってる会社があって、それぞれがサポートを提供してるっていう感じだった。そうですね、うちとか、オムロンとかが作ってたんですね。オムロンは結構、今でもオムロンの UNIX マシンだったっていう

人がいるんですけど。うちは結構、中堅の会社にガッツと納品するような格好で。あまり有名じゃないんですけどね。作ったのはだいぶ古いんですよ。

そういうのを作って売っていたので。それでソフトの開発はやらされたというか。UNIX ワークステーションを使って何か応用製品を作れ、みたいな格好になったんですね。

——実際、こういった形で活用された製品っていうのは、何かお伝えで教えていただける範囲で。

入って割と早いうちに何をやらされたかというところ。最初はね、さっき言ってたモトローラの MC68000 シリーズの CISC のプロセッサを入れた UNIX ワークステーションだったんですけど。途中から MIPS っていう会社のね、R2000 とか R3000 とか、あの辺のチップを入れた RISC の UNIX ワークステーションを作り始めたんですね。そのハードが、要するに RISC になったら MIPS 値だけはすぐ上がるんで、性能が一〇倍になったみたいなことを言うわけですよ。その、ハードウェアを使って別製品を作ってください、というのが仕事で与えられて。

プロジェクトとしては、監視庁の信号制御装置。ああいうところの OS としてそれを入れなさい、とか。

たくさんの信号機のデータを送ったり、逆に、信号機の近くに超音波センサーとか並んでるんでね、混み具合とかを測るんです

よ。そのデータが上がってきたりするんですね。それを定期的にデータを入れて計算して、データをまた流して、みたいな。そういうことをやるような仕組みが、いわゆる交通管制センターにあるんです。そこに納品する計算機として入れてください、って言われた。

性能が一〇倍以上になっているから、一〇分の一のリソースでできるんじゃない、って言われて。そんなわけないでしょっていう話をして。だいぶそこでいろいろ言って、上の方にも納得いただいて。信号制御を、UNIX ワークステーションの中にいきなりデータを突っ込むじゃなくて、いわゆる小亀って言ってましたけど、サブ基板がずらっと並んで。そこにまた、ある程度処理できるような CPU をずらっと乗つけて。そこに交差点情報をリアルで流し込むと、そこである程度処理してから上側に送って、上側というか RISC の UNIX 側にデータを送って。さらにそこでもう一度処理して、大きな、いわゆる指示用のパラメータを落としてもらって、また下が計算してそれを下流に流す、みたいなね。そんなような構成にしてもらって。そういうのをやりましたよ。ほぼ初仕事に近いと思います。

——当時からかなり UNIX が、組み込みといえますか、基幹システムみたいところで使われてる。

そうですね。その時はもう、初めてだと思います。UNIXのOSで、いわゆるそういう信号制御のセンターのところに入れるみたいな話。

——じゃあ実際に、UNIXがちゃんと使われ始めたっていうところっていうことなんですね。

そうですね。それ以外の使われ方だと、普通にCADの端末とか、そういう扱いですね。

——実際じゃあ、そのままお仕事を続けられていく中で、ソフトウェアをどんどん触っていかれていって、今に繋がれていますか。オープンソースとか、そういったところに関わっていかれたっていうような。

オープンソースは、もうひとひねりあって。社会人が長いんです。さっきまで言ったのは事業部門だったんですけど、そこから今度は研究所に移れて言われたんですね。私自身がずっとハードを作りたい作りたい言ってたもんで、ハードを作らせてやるから研究所に移れ、というふうに言われて。

研究所に移って、今でいうとNVIDIAの、ジオメトリを計算するようなICってあるじゃないですか。あれ、一つの大きなLSIになってますけど。あれを、LSIなんかまだ作れないような時代だったので、あのレベルは。なので、ちょっと計算が早

いようなRISCの、ただデータバス線だけ大きいようなCPUをタンデムで乗っけて、ジオメトリの計算をひたすらガッツと流して、みたいな。そういうようなCPU基板みたいな。それが基板になってますけども。全然能力は低いですけども、NVIDIAのチップと同じようなことをやってるんですよ。そういうやつを設計して出したりとかは、させてもらいました。

そういうのがあるんで研究所に移ったわけですけど。研究所に行くと、今度はインターネットにつながるね、みたいな話が出てくるわけです、その頃はね。ただ、インターネットと言っても、みんなその頃は電話でつないでる、DCCPでつないでる。電話でデータをバケツリレーしてるネットワークがインターネットだったんですよ。何をやってるか、というと、メールの配送と、ニュース、電子ニュースの配送ぐらいしかやってなくて。そもそも円なんか全然つながってないんで。というようなのをやってる人たちがいて。

大学は、その前からいわゆるIPネットワーク、WIDEやったかな、そういう学術ネットワークみたいなのがあって、IPでつながってたりするんですけど。そこになんとかつなぎたいみたいな話をやってた人がいますと。私、だから大学の時に、そういう大学の研究室に端末がたまたま来て、そこで私、ニュースとかで遊んでたり。それをどうも知られてたんで、お前やれ、手伝えと

いう風になって。うちの電子メールの仕組みとニュースの仕組みを維持するというようなお仕事の手伝いをやり始めましたと。

そこら辺からなんですよ、いわゆるオープンソースに近いものに触れてくるのは。

ニュースの中にですね、プログラムを配ってくる人たちがいるんですね。☞とか言って、フロム・ジャパン。日本でそういうことをやってる人もいるし、comp.何とかとか、いわゆるアメリカ中心ですけども、研究者たちがいろんなものを投稿するようなニュースグループがあつて。そこに、ライセンスとか、そういうの、全然その時は何にも書いてなかったんですけど。こんな面白いプログラムがあるよ、みたいなのをポシポン投稿してくれるような人たちがいっぱいいた。そういうののうちで、役に立ちそうなのをピックアップして、会社の中、研究所ですけどね、そこで動かしてみて、みたいなことをやり始めたのが、割とオープンソースに近い動きですかね。

——今、フロム・ジャパンとかについて調べたり。実際そういうニュースとか、そういったものをみんなで共有するような文化の中でやっていうこと。なるほど。

なので、そこら辺で。ちょうどそれと同じぐらいですかね、NCSA Mosaic とかが出てきて、ワークステーション上で Mosaic ブラウザを動かして、これはすごい派手だ派手だ、みた

いな話が出つつ。でしばらくすると今度、IP ネットワーク、☞接続かな、UUCP じゃなくて本当に IP でインターネットにつながるみたいな風にもなってきた。でゲートウェイを作る手伝いをしたりとか、そういうことをやってきました。

なんです、今度はその後、私、研究所から情報システム部に異動するんですよ。で、情報システムで何をしたかというと、研究所でつないでたメールの仕組みを丸ごとガサツと移管されてきて。全従業員にその ID をばらまくと。メールサーバーをとんでもなく増やすと。ゲートウェイももうちょつときちつと整備して、会社の中のネットワークも全部 IP で接続するようにして。DOS、MS-DOS の 3.1 から Windows の 95 とか 98 とかに従業員のパソコンを変えて。で、Eメールの使い方はこうだよとか教えて、ブラウザ、ネットスケープの使い方はこうだよとか教えて、みたいなことをするのが、情報システムでやり始めた大きな仕事です。

そうやってきた時のベースの仕組みで、初めてオープンソースを使ったらどうか、という話が出てくる。もともとフリーのソフトをいっぱい使ってたじゃないですか、☞何とかで。その辺でいろんなものがあつたんですけど。オープンソースという言葉が、ネットスケープがオープンソース化したぐらいのタイミングで出てきて。それで、いろんなものを使って作ったらどうか、みたいな、当時の上司から言われて。

ただ、自分で、要するにオープンソースとかいう話が出るより前から、結局、流れてくるソースコードを使うか使わないか、何かトラブルが起こった時に直さなきゃいけない、全部自分でやらなきゃいけないと。オープンソースも基本一緒ですよ、ということとでいくと、自助努力の範囲でできるものでないと全社員向けには提供できません、というふうに、頑なに拒んで、というかね。やばいからね。

——会社の方からそういうオープンソースを使ったらどうかって言われたりっていうことがあったそうです。

そうです。上司が結構ラジカルな人でね。そういうことを言いたがるので。

——なかなか当時だと、使わないっていうのは。

多分、情報システム部では個人情報ぐらいいしか関わってなかったんで、見える範囲は。メールとニュースとゲートウェイあたりは分かるけど、OSは無理です、と。Linuxが出てきてるやつって言われましたけど、その当時 Slackware ぐらいいしかなかったんですけど。無理です、こんなもん、見てられませんと。一番最初にそういうのを展開したときは、OS 部分は、その当時は Solaris だったんですけどね、Solaris 2 何ぼみたいな感じになってたんですけど。それで OS 周りは全部揃えて、その上に、いわゆる

オープンソースのサーバー類を載せるという構成で、従業員向けの仕組みを提供すると。

そこからオープンソースというのに関係してくるわけで。ネットワークがもろもろあって、Firefox、Thunderbird とかに変わるじゃないですか。その頃に、いわゆる Mozilla Japan さんが、実は声をかけてくれたんですね。私らが、ネットスケープから Firefox、Thunderbird に変えますと、社内に実装を変えますという風なことを言って。オープンソースをそれなりの規模で採用してるし、しかも「ベンダーじゃないところで採用してるっていうことで珍しい、みたいな格好で、日経さんとかに取材されたりとか。そういうのも、ちょっともしかしたら時間関係が前後してるかもしれないですけど、同じくらいのタイミングで Mozilla さんからも、こういうことをされてるのか取材したいです、みたいなお話が来て。Mozilla の瀧田さんとかとお話ししながら。Firefox は今でも社内ですと使ってるような格好になってきます。

Mozilla さんは会社の形を取ってますけど、そうじゃない、Mozilla 組だった頃からね、実は使ってたので。いわゆる、なんだったかな、OS だったかどうか分かんないですけど、そういう展示会とかでお話につながるようになって。で、うちで使ってるんですよ、みたいな話とか、そういうことをさせてもらったり

とかして。そうすると今度は、OSCの場で、いわゆる事例として紹介してくれ、みたいな話がパラパラ来るようになってまして。

で、ちょっと時間が後だったんですけど、OpenOffice.orgというのも使い始めたので、それもこんなの使ってますよ、みたいな話をOSCなり、そういうことを日経でも取り上げられたことがあります。

——そうですね。記事を拝見させていただいて。結構全社で。

そうですね。今でもインストールベースは非常に多いですよ。

——そうなんですね。未だに OpenOffice.org は、今 LibreOffice になりましたか。じゃあ基本的に、未だに LibreOffice を使った。

使ってるとは言えない。なぜかというと、インストール基本セットみたいなのがあって、そこには LibreOffice とか入れているんで、インストールベースは多いんですけど。コロナの時に、全員にマイクロソフトのIDを付与してるんですよ、Teams を使うために。そうすると、全員が今度は MS Office を使えるんで。高いから買えない、買えないから LibreOffice を使ってます、みたいな層がいなくなってるんですね、今は。

ただ、MS Office で何か脆弱性が出てやばいわ、みたいな話になった時には、ちょっと代わりに使う用のものは入ってるよ、っていう。そういうようなことになってますね。

というあたりから、オープンソースの人たちとはちょっとお付き合いが始まる、みたいな。そんな感じになります。それが二〇〇五年とかぐらいですかね。

——なるほど。オープンソースにそれこそ関わっていく中で、実際にオープンソースを支える側といいますか、オープンソースソフトウェア協会みたいな形で関わられていくと思うんですけど。そうしたのも、今の流れの続きでっていう形で関わられていったっていうことなんですかね。それとも何かの一つ。

オープンソースの、私個人の付き合い方というと、実は二面性がある。いわゆるコンピューター好きの人という意味では、オープンソース好きです、と。それがベースにありますと。それがベースにあるんですけど、関わってるっていうところまではいかないはずなんです、それだけだと。

関わってるのは何ですかっていうと、実は、会社の仕事として全部やってます。

——今までの会社の仕事と関わりながらやっていかれている。なるほど。

基本的に、オープンソースって、みんなが使って盛り立てていかないと死んじゃうものじゃないですか。私らが会社で採用したら、オープンソースが死んじゃうと困るんですよ。私らが困るから、死なないように応援したいです、というのが活動の中で、今みたいなことを起こしている、というようなことです。

——じゃあ実際、そういったお仕事の一端で、オープンソースの団体であったりとかに関わるような形をされてる。なるほど。

そういうことをずっと続けてて。先ほちょっと言いましたけど、ラジカルな上司がいますって言ったと思うんですけど、その人がですね、実はオープンソースソフトウェア協会にも入ってますよ。

中に入っていて、やっぱりよく分かんないので、大釜またやれ、と連絡してくるわけです。元上司なんで。関わってるといいうか、協会に入ったのはそういう理由です。だから、自分で手を挙げて、ぜひ入れてください、というわけではない。ただ、入った限りは、そもそもオープンソース全般については応援したい立場はあるので。元上司から言われてますけど、その時の私の直上の上司のところを通じて落ちてきた話なんで、仕事としてやりましょ、としてもらって、今に至るということですね。

——実際のお仕事の延長線上であるっていうようなところで。やはりオープンソースを守っていかなければ、というか、継続していく。なるほど。

とは言いながら、ベースはオープンソース好きなんで、うまくいくようにという方にバイアスはかけますけど。基本的には、いわゆる会社の仕事として、オープンソースというものがちゃんと発展していくように。もっとダイレクトに言うと、我々が使ってるオープンソースが死なないように、というようになる。

同じように、うちの会社になるんですけども、ある時からデータベースの方もPostgreSQLを主体的に使います、というふうになります。そうすると、PostgreSQLのユーザー会の、いわゆる企業ユーザー会みたいなのが多分あると思うんですけど、その設立を、私じゃなくて、別のデータベースとか社内システムを作っている人たちで関わってきたりとか、いうふうな動きになったりとかしてますよ。

それも、PostgreSQLがダメになるとまずいので。企業ユーザーがいっぱい集まって、これ結構使いやすいデータベースなんで、みんなで使いましょよ、と。情シスの人、SQLを凝るので、他のDBじゃダメなんです。複雑なSQLが通らないので。PostgreSQLだと結構通るので、そんなに大きなシステムでなければ、基本的にどこでも役に立つはずですよ、ということなので。それを広めていくという活動をされていると思います。

——なるほど。会社全体でそういった形で関わっていったということをやられている。なるほど。いろいろ調べたところだと、最近だとセキュリティの分野も、オープンソースとかの部門でもCSIRTとか、そういったところをやられていたりというところ。最近のお仕事としてやられてらっしゃるのこなっているところなんですけど。もしよろしければ、そういったところ、近年お仕事としてやって、そういったところがOSSとも関わったりとかあるんですか。

どうなんですかね。えっとですね、それで言うと、実は、うちの会社ってITベンダーとかじゃないので、ITの技術力がそんなに高いところじゃないという風に認識してるんです。そうするとね、何でもかんでもオープンソースを使っただけ、にはならない。自分で責任を持てる範囲でないと使っちゃダメよ、っていう風に基本的な方針は立ててるんで。いわゆる採用するっていう風なことを真面目に検討するようなチームが、一応、世代が代わりいろいろあって形も変わってるんですけど、ずっとあるんですよ。

そういう意味では、何でもかんでも盲目的に採用するんじゃないくて、一応評価した上で、これだったら使える、コミュニケーションにも大丈夫そうだし、いいんじゃない、っていうようなものしか使ってない。ということは、結構少ないんですね。オープンソースをよく使ってる会社って言われてますけど、使ってる本数は多いんですけど、種類は少ないんですよ。

——そういう意味で言うと、脆弱性にぶち当たる数は少ない。ちゃんと精査されてるから。

そうですね。ちゃんとしてるところを基本使いなさい、っていうことをしてるので。何か脆弱性が出てきても、割とすぐにパッチが出るとかいうことになって。そういう意味では、あまり苦労は実はしてない。何でもかんでも使っていっている風にしてないから。

——逆に言いますと、その作業がやはり、やられていらっしゃる。そういうチェックであったり、審査とかをやっていうのが、やはり大変だったりっていう感じなんですか。

そうですね。それなりに分かっている人間でないと、やっぱり判定できないので。そうですね、それをやる人は選ぶと思います。

——そういったことを最近には主にやられてらっしゃるとうか。

私はやってなくても、次の世代の人たちがやっていますよ。そうですね。形はあるんで、同じことはずっとやっています。

——現在は、実際どういったお仕事に関わられていますけど。

所属はそうですね、SEI-CSIRT 室というのが本務になって。ここはグループ全体のサイバーセキュリティの統括って言うてますが、統括なんですね、実働しないんですよ。ちゃんとやれっというだけで。基本的には。なので、しんどくはないっていったら嘘にはなるんですけど、そんなに、何か起こってとか、何か導入してとかいうことを自分でやることはない。

それをやるのは実働部隊でやって。例えば社内システムだったら情報システム部がやりますとかありますし、工場だったら生産技術部がやりますとか。私たちが作っている製品とかに対してセキュリティレベルを上げますという話については、事業部門のいわゆる開発部隊がやります、となって。いわゆる CSIRT、PSIRT の実働部隊をいっぱい作っている。

関わってる人たちというのがリストになってたりするんですけどね。いわゆる、全部別に辞令が出るわけじゃなくて、あんだ、こういうやつもやってくださいね、っていうようなことを言っちゃってもらってる人たちが、昔数えたとき、七〇〇人ぐらい。逆に言うと、それぐらいの人たちでやらないと、多岐にわたるすぎてるんで。

——そうですよ。そういうところに対してやってくださいっていう。なるほど、そういう立場ですね。

あと、それ以外に社外とのやり取りですかね。あとは上の人たちのやり取り。そういったところをやってる部署になります。あと、全体方針かな。会社グループ全体の方針作りっていうところですかね。

——実際に、実働というよりは、やはり全体的に会社としてどう使っていくかっていうところ。

セキュリティという意味では、そういうことになります。オープンソースだから商用だからって区別してないですよ。統括的に、ソフトウェアに対してある程度審査して、そういうものを採用するかしないかっていうところを判断するようにしています。

——そういったところでやると、オープンソースだから商用だからみたいな理由でなかったりならなかったりっていうのは、やはりそういったところはない、っていうか。

そういう意味で言うと、販売元、商用だったらね。オープンソースだったらプロジェクト、コミュニティ、そこは見ますよ。やっぱり一度会社で採用しちゃうと結構長い間使うものなんでね。うちの会社なんかだと一〇年使うのは普通なんです。そういう意味で言うと、なんか怪しいことしてるところは、やっぱり避けますですね。避けようがないところもたまにあるんでね、マイクロソ

フトさんとかね。そういうところは仕方がないかな、というのはありますけど。

——そういうところと実際、採用するってなったら、関わりに行くといえますか、何かしらアプローチを取ったりっていうことを実際されてるっていうことですか。

そうですね、基本的にはそんな格好ですね。とは言いながらね、いわゆるお金の契約で済むところは、そこで済ましてるかもしれないです。だから Linux でも、無償の Linux とか使った時もあるんですけど、結局は、ちゃんとドライバーまで、何か問題があった時は修正してよね、っていうことを言いたいので、有償のサービスがあるところと契約して使ってます。ライセンス料を払ってる方法ですかね。そこで済むのは、それでやっています。

——なるほど。そうなってくると、やはり商用とオープンソースで結構出てきて。いまだにオープンソースを使い続けてる理由といえますか。なんとなく商用とかに置き換わっていったりっていうことも逆にあたりっていうことはあるんですけど。逆に言うと、商用がオープンソースに置き換わるみたいなこともあるんですか。

基本的に、社内システム、基幹システムの構成はこんなんだよ、というのも標準で決めちゃってるんですよ。そこは今、ベ-

スは Linux の上に、うちで開発した、いわゆる基幹システム用のフレームワークみたいなもの。あと、その上や下やらにオープンソースが刺さってて、っていうようなものをベースにして。それはもう、ここ二〇年ぐらい変わってない。変わってないというか、中身は差し替わってるんですけど、その構図は変わってない。

そういう意味で言うと、Windows OS が入ってくるっていうことは、まあ少ないです。ないわけじゃない。ないわけじゃないというのは、Windows OS でしか動かないようなソフトウェアを使いたいとか、というような時ですかね。あとは、Windows のパソコンが皆さんのコンソールになっているので、そいつを制御するとか、監視する、管理するみたいなものは、だいたい Windows ベースの OS の上に乗っかってますんでね。その部分はある程度は並んでしましますね。それはそれで別に禁止してるわけではないので、いわゆるアプリケーションプレイヤーとして使います。

——はい、ありがとうございます。会社の方ではそういった形でやられて。オープンソースのソフトウェア協会の方だと、大釜さんが独自に何かやられてたりとかっていうのは、何か最近あったりとかは。特にあったりっていうわけではない。

独自にはない、というか、そういう概念がほぼなくて。オープンソースソフトウェア協会、一応理事をやってます、なんですけど。理事もやってますが事務局もやって、事務局長っていうことになってますよね。そうになると、いろいろ勝手にやろうと思ったら勝手にできちゃうんですけど。そんなことをやったらいろいろ怒られるので。ちゃんと事務局会議なり何なりでもって、毎月ですね、方針を確認して、次はこんなことをやろうか、みたいな話も相談しながら。理事・事務局、だいたい五、六人ぐらいで毎月やってるんですけど。というのをしながら、方針を決めて。

自分たち独自のイベントごとでも年二回から三回ぐらいやってます。OSCの参加はなるだけ出ます。特に地方とかは、いろいろコネクションを作りたいところもある。

あと最近はですね、ちょっと前は若い子が全然来なかったんですけど、最近また学生さんが来るようになったので。学生さん向けに、ちょっと、「オープンソースとは」、みたいな話を展開できるように配り物を作ったりとか、いうようなことはやってますね。基本的に相談した上で。実は割と私だけに近いんですけど、いろんなものを作ったりとかするのはね。私の方でお金も管理しているものですから、いろんなところに制作発注したりとかするのも私の方で手配するというような格好になってますね。

会長さんとかは、現地に来てもらって講演してもらったりとか、もの配るのを手伝ってもらったりとか。逆にメインで座って

もらったりとか。あとは何かな、懇親会の方はどっちかというとか会長さんに出てほしいんで。この前は懇親会でいろいろお話ただいて。そんな感じですね。独自では動いてないです。

——でも、かなりボールを持ってるいろいろやられてるっていうような形なのかなって。

そうなんですよね。そこそいろいろやってるのに、独自でやったら死んでしまうわ、とか。

——ありがとうございます。そうですね、じゃあちょっと最後の方になってくると思ってますけど。今、オープンソースとか使われて。最近とかだと、今までオープンソースで、結構最近それこそ私たちのような学生であったりとか、結構盛り上がっているといますか、ある種活発になってきていて。環境もある種モダンな開発環境といえますか、AIであったりとか、そういったものが出てきていて。オープンソースもコミュニティが、AIを使ったコミュニティ、いろいろ難しいところが出てきているように、傾いから見て思うんですけど。そうした中で、近年そういったところで課題ではないですけど、変わってきていることとか。そういったところで難しいとか、悩んでいらっしやることとか、そういったところとかって何かしらあったりとかありますか。

悩んでるところは、何年前かは、本当に若い人がいないねっていうのは悩んでたんですよ。OSCに来てもないねっていう話があったので。ちよつとどういう理由か分からないんですけど、最近増えてきておられるので、そこは悩みは解決した、というか、何もしてないんですけどね、こっちは。なんか人が来てくれるなっていうのがある。

逆に、興味を持ってくれた人が、なんか、返ってこなくなるみたいなことにならないといけないな。それにはどうすればいいかな、っていうところは気をつけておかないといけないかな、というふうに思います。

あとはAI関係は、会社で使う場合もそうなんですけど、まずコード生成については、コードがライセンス違反を起こしてないかが心配ですね。だから、AIを活用してコード生成までやってオープンソース化したら、Black Duckあたりから、このオープンソースから取ってきてませんか、なんて言われたらまずいわけです。会社側もそうなんですけど、会社側でいろんな開発で作ったやつをAIでコードを作ります、って言ったときも、それ大丈夫か、みたいなのが常にあるので。そこは時間の問題だと思ってるんですけどね。ある程度解決されてくるだろうと思うんですけど。今は心配、心配。心配だけど、時間が解決するはず。偉い人たちは解決してくるはず、っていうふうに思っています。

——実際に活用する。実際にもう社内の方では活用されてらっしゃるっていうような。

テスト的にはやり始めてはいます。本格的にはまだやってないはずです。

あとね、製品の方にそういうものを入れられると、それはそれでもっと困るんで。

そこはちよつと心配してる。製品の開発環境は、こっちからちよつと見えないところもあるんでね。心配ですね。

——そうですね。それこそオープンソースにAIを使ってライセンス問題が、みたいなところが。実際に社内で採用されてらっしゃると、なかなか難しいところがあるのかなっていうのは、すごいお話を聞いてて感じてたっていうところで。やっぱり心配っていうところになるんですかね。

一応、公式に心配しなくて大丈夫ですよって言ってるのは、GitHub上のCopilotぐらいだったと思うんです。要するに、ライセンス違反を起こさないようなものを作りますよって言ってくれたと思うんです。ただ、会社のシステムをGitHubで作ると変えたら、それはそれでまた別問題が起きるんで。そうですね、ちよつとね、というところはありますね。

あとは最近だと、AIで脆弱性がいっぱい見つかって、修正のプルリクがいっぱい飛んでいって開発者が激怒して、みたいな世界

がありますけど。元のコードはよろしくないって言ってくれてるんだから、そこはやっぱ直していくんだろうな、と。今まで見つからなかったものをAIが見つけてくれた、っていうことではあると思うので。ただ、今は大量に来すぎてるんで、っていうことで、産みの苦しみに近い状態になってんのかな、っていう風に思います。

やっぱオープンソースだけじゃないんですね。商用でも、例えばマイクロソフトさんのパッチが、ここ三ヶ月とんでもない量があったりとかね。Chromeのパッチがえらい頻度で飛んでくるなどかね、ありますでしょ。なので今、ソフトウェアはみんな多分AIでもいろいろチェックされてて、いっぱい修正させられてると思うので。そこがある程度落ち着いてきたら、どっかで収束するはずだと思ってますから。時間の問題だろうなと思いつつ、ちょっと心配してます。

これは心配してます。体力があるところは大丈夫なんですよ、MSさんとかGoogleさんとか。体力があるところはいいんですけど、体力がないオープンソースプロジェクトは、多分、対応しきれないみたいなことになっちゃうんじゃないかな、というのはちょっと心配してますけど。

——ありがとうございます。そうですね、最後と言いますか。今後、ソフトウェアに、多分これからお仕事として関わって、お仕事も含めいろいろ関わっていかれると思うんですけど。今後ど

ういった、今まで通りというか、何かしら関わり方に対して、今後どうしたいとかっていうところとか、何かしらお持ちだったりとかしたら、もしよろしければ教えていただきたいというふうに思うんですが。今まで通りであれば、そういった形というのものがすごくあると思うのですが。

そうですね。端的に言うと、結構忙しいので、こんな風にしたいですみたいなことは、まだ今、頭が回ってないのは実情ではあります。何かきっかけがあって、その形が変わるような、今までもちょこちょこ経験はしてますので。時が来れば何か変わるんじゃない、っていう気はしてます。それが楽しみなのかどうなのか分かんないですが。気が付いたらこんなことになってましたわ、みたいな話はあるかもしれないです。

自分自身は、今の状態でタスクがいっぱいあるんで、大変は大変なんですけど、充実はしてるんで、別にいいかなと。OSCであちこち行かせてもらって、そこで若い人とお話。特にこの間なんか、横に居た人は高専生でしたからね。一八歳ですからね。

——そうですね。そうなんです、高校二年生とかだったり。

そうなんです。高校二年生の人が右隣にいて、右斜め前にRubyのまつもとさんがいて。どういう状態や、とか思ってたけど。みたいなことがあって、楽しいなと思ってますんで。楽しいうちは、そのまま頑張っていきたいと思ってます。

あとは、基本的には、好きな世界が広がればいいなというのはあるので。オープンソースに限らず、プログラムをみんな楽しく使ってもらえるというところが広がれば、非常に嬉しいかなと思ってるんで。そうなるものに何か関われるなら、関わるようにしたいかなと思ってます。

個人的にはゲーム大好きじゃないですか。

——最初はX68000ですからね。そうですね、これでプログラムを作ってゲームとかされたりとか。

暴走族みたいに、処理が早いのが好きな、その辺からなんですよ。CPUを遊ばせたくないんですよ。

——今でもゲームは結構やられてるんで。

そうですね。オンラインのゲームとかやってますよ。

——いいですね。ありがとうございます。すみません、もうそろそろお時間、一時間ぐらいお話をいただいて。すみません、貴重なお話を一時間ありがとうございます。

お役に立っていただければいいんですけど。

——もう、ぜひこういう形でいろんな方に。本当に当時と言いますか、私もUNIXとかを現役で触ってるような方とか、実際どう

だったのかって知らなかったっていうところが正直なところで。こういう皆さんの温度感とかをすごく知りたいなっていうところがあつたので、すごい貴重なお話を聞きすることで、すごい嬉しく。ありがとうございます。

——はい。でもまた、ぜひOSCの方はかなり、また今年も何回か参加させていただければと思っているので。もしそこでお会いできたりすればということ。

分かりました。

——はい。すみません、お時間いただきありがとうございます。

来られるんですか、OSC京都は。

——ちょうど私、大学の試験がちょうど被ってしまつて。一〇月の東京は行けると思ってますけど。

そうですね。ごめんなさい、東京、私はいないんで。またどうぞよろしく願います。

——ありがとうございます。よろしく願います。お時間ありがとうございました。

語注

PC-1211 シャープが一九八〇年に発売したポケットコンピュータ。電卓の形をしていて、BASICが動いた。

X68000 シャープが一九八七年に発売した個人向けコンピュータ。ゲームの表現力で知られた。

Z80` MC6809` MC68000 いずれも当時のCPU。Z80とMC6809は八ビット、MC68000は十六／三十二ビット。

CISC` RISC CPUの設計思想。命令を多く持たせるのがCISC、単純な命令に絞って速度を上げるのがRISC。MIPS社のR2000・R3000は後者の代表。

Pascal 手続きの構造を明確に書かせる、教育にも用いられたプログラミング言語。

データフロープロセッサ 命令を順に実行するのではなく、データが揃った処理から動かす方式の計算機。

LISP 人工知能の研究で長く使われてきたプログラミング言語。

UUCP 電話回線でデータをバケツリレー式に転送する仕組み。インターネット普及以前の電子メールとニュースを支えた。

ニュースグループ、㊦ 話題ごとに記事を投稿し合う分散型の掲示板。㊦は日本国内向けの一群で、from Japanに由来する。

WIDE 日本の大学や研究機関を結んだ学術ネットワークの研究計画。

NCSA Mosaic 一九九三年に公開された、画像を表示できる初期のウェブブラウザ。

Slackware` Solaris 前者は初期のLinuxディストリビューション、後者はサン・マイクロシステムズの商用UNIX。

Mozilla` Firefox` Thunderbird ネットスケープの公開されたソースを源流とする、ブラウザとメールソフト、およびその開発団体。

OpenOffice.org` LibreOffice 無償で使えるオフィスソフト。前者から分かれたのが後者。

PostgreSQL オープンソースのデータベース管理システム。

CSIRT` PSIRT 組織の情報セキュリティ事案に対応する専門チーム。製品を対象とするのがPSIRT。

Black Duck ソフトウェアに含まれるオープンソースとそのライセンスを検出する検査サービス。

Rubyのまつもとゆきひろ まつもとゆきひろ氏。プログラミング言語Rubyの作者。

奥付

本書は、情報通信研究機構（NICT）が主催する SecHack365 の、二〇二六年度融合駆動コースにおける活動として編んだものである。

本書に収める各篇は、クリエイティブ・コモンズ表示・改変禁止四・〇国際（CC BY-ND 4.0）のもとで公開する。出典を示せば誰でも自由に使えるが、書き換えたものを配ることはできない。

これに加えて、各篇の語り手および編者は、原文の趣旨を損なわない範囲で本文を翻訳し、その翻訳版を公開・配布することを許諾する。その際は、翻訳であることと翻訳者名を示すこと。

第一篇

2026年7月15日 オンライン 57分39秒

第二篇

2026年7月17日 オンライン 46分20秒

第三篇

2026年7月23日 オンライン 51分47秒（冒頭欠）

第四篇

2026年7月18日 オンライン 56分24秒

第五篇

2026年8月1日 対面 40分47秒

第六篇

2026年8月24日 オンライン 63分

第七篇

2026年8月26日 オンライン 43分32秒

第八篇

2026年8月27日 オンライン 61分33秒

第九篇

2026年9月2日 オンライン 50分16秒

第十篇

2026年9月5日 オンライン 76分07秒

第十一篇

2026年9月9日 オンライン 49分03秒

第十二篇

2026年9月9日 オンライン 45分26秒

第十三篇

2026年9月10日 オンライン 54分37秒

第十四篇

2026年9月20日 オンライン 55分03秒

第十五篇

2026年9月23日 オンライン 72分22秒

第十六篇

2026年9月27日 オンライン 53分21秒

第十七篇

2026年9月30日 オンライン 88分47秒

聞き手・編

大川貴久

書名

OSSの生活史 第一集

編・発行

大川貴久

連絡先

okawa.takahisa.25@shizuoka.ac.jp

発行日

2026年9月10日